

# チープなデート

平井 文子

出勤前に喫茶店でコーヒーを飲んでいたら携帯が鳴った。画面には電話番号だけが光っている。こんなに朝早くから誰からだろう？ 涼子は不安な気持ちで着信ボタンをプッシュした。

「もしもし、涼子さん？ 朝から突然の電話で驚かれましたよ。ワタナベです」ワタナベ？ よくある名前だ。どちらのワタナベさんかしら？

「涼子さんの一階上にいるワタナベです」

思い出した。一階上のオフィスには確かにワタナベさんがいる。長身で優しそうな雰囲気なので、私のタイプかなと思っていた初老の男性だ。それにしても涼子さんだなんて気安い人――

涼子は五十八歳からの入社なので嘱託社員だった。一階上にも定年を過ぎてから再就職した二十人ほどの嘱託社員がいる。

「涼子さんが入社された時からずっと気になっていたのですが、今日思い切って電話しました。いちどお茶でもご一緒していただいけませんか。お願いします」自分はもう若くはない。いままさら億劫な気がしたが、この歳になっても声がかかってくるのはありがたいことだと思えた。それに、気に入ったタイプだ

し、子供たちが独立した後の独り暮らしの無聊もあって、「ええ、大丈夫です」と応えておいた。

それからは時々電話がかかってくるようになったが、「申し訳ないがそちらからかけ直してくれませんか」と言っただけで電話を切るのだ。その度に涼子の方からかけ直すことになる。「どうしてすぐに電話をお切りになるの？」と聞いてみると、悪びれる様子もなく、

「電話代が急に高くなっていると女房に分かりますので」と言われた時には啞然としてしまった。

最初の待ち合わせは帝国ホテルのロビー。ゴージャスなデートの予感がしたが、連れていかれたのはガード下の飲み屋だった。オーダーするのは二種類のおつまみとビールだけ。涼子はアルコールに弱いのでコーラーを飲みながら話をした。映画マニアの彼は映画のことにはとても詳しくかった。その点、映画フアンの涼子とは話が盛り上がり楽しかったのだが……。

「涼子さんのようなチャーミングな女性とお付き合いできるなんて夢のようです」とか、「女優さんのようですね」、「一日中涼子さんのことを考えているので仕事が手につかないんですよ」など、こちらが照れるような臭い言葉を連発する。自分の容貌は人並み程度だということくらい涼子自身がいちばんよく知っているというのに……。歯の浮くようなおせいじとはこういうことを言うのだろうと思いつつも悪い気はしない。それに、映画の話は楽しいので、一ヶ月にいちどは会っていた。並んで街を歩いていると、「少し後から付いてきてください」と

言うのだ。そのくせ、「こんな美人と街を歩けるなんて初めてですよ」と、嬉しそうに相好を崩す。

「いったいどうなっているの？ 女性と付き合いたいが、世間と女房が怖いということなのか——。そんな男性だから安心と言えば安心だった。まさかラブホテルに誘うことはないだろう。涼子はこれまで何人かの男性とボーイフレンドのつもりで付き合ってきたが、たいていの人が最終的には身体を求めてくる。それが嫌で長続きはしなかったのだが、その点ワタナベさんは安心だった。」

「浮気したことあります？」

涼子は意地悪な気持で聞いてやった。

「いやー、これでももてないほうではないので付き合った女性は何人かいますが、どういう訳か長く続かないんです。女の人には難しくてもよく分かりませんわ」

「奥様とは恋愛ですか？」「いや、見合い結婚です。お互いに晩婚でしたが、私にはもったいないような素晴らしい女房です」平然と言う。

女性の心理が全く分かっていない。これじゃー、女性とは長く続くはずがないだろう。

現役時代のワタナベさんは大手の商社マンで何カ国かに赴任していたらしい。商社マンらしく見掛けは紳士である。海外での生活を経験しているのならもう少し女性に対して洗練されていていいはずなのだが……。

「たまには外で会いませんか、新緑の上野公園でゆっくりと話

がしたいなあ」そう言うので、金曜日の夕方、上野公園で会った。その日ワタナベさんは家庭のことばかり話していた。一男一女がおり、二人とも一流大学を出て大手企業に勤めているという。

「もったいないようないい奥様と優秀なお子さんに囲まれてお幸せですね」涼子は皮肉のつもりで言った。

「まあね、子供の頃は貧しくて苦労しましたが、今は幸せです。ところで喉乾きませんか？」しゃべり疲れて喉が渴いたのだろう、ワタナベさんはベンチを離れ、自動販売機でジュースを買ってきてくれた。売店で買ってきたのか自分は缶ビールを手に入れている。

「夕飯時ですが、お腹の方大丈夫ですか？」涼子は含みのある言葉で訊いてみた。「女房が夕飯を作っていますから私は大丈夫です」と言うだけである。

「今日は私にご馳走させてください。いつもご馳走になってばかりだから、たまにはいいでしょう」

皮肉ではなく、涼子はお腹がすいていたので本気でそう思っ  
て言ったのだった。

「いえ、ありがたいが家で用意して待っていますから、今度ご馳走してください」

涼子はその時、この人とはもう終わりにしようと思った。ベンチで座りながら缶ジュースだけのデートなど、心が風邪をひく。ワタナベさんを愛しているのなら一緒にいるだけでも幸せなのだが……。